

『程氏家塾読書分年日程』訳注(四)

中嶋 諒・松野 敏之

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌第一号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者(氏名の上に「※」を表記)の草稿を元に作成している。

清水則夫(早稲田大学文学学術院講師)・北澤絃一(早稲田大学文学学術院講師)・宮下和大(早稲田大学大学院博士後期課程)・*阿部光麿(早稲田大学助手)・大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・*小池直(早稲田大学大学院修士課程修了)・原信太郎アレシヤンドレ(早稲田大学大学院修士課程修了)・上村新治(早稲田大学大学院修士課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院修士課程)・阿部亘(早稲田大学大学院修士課程)・佐々木仁美(早稲田大学大学院修士課程)・梶田祥嗣(早稲田大学大学院修士課程)・*中嶋諒(早稲田大学大学院博士後期課程)・*松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)

【凡例】

・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

・解釈には、『程氏家塾読書分季日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。

・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。

・原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。

・注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略した。

・訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』巻一（底本 卷一・十四丁表～二十五丁）】

小學書畢。

次讀大學經傳正文。

一、讀書、倍溫書、説書、習字、演文、如前法。

次讀論語正文。

次讀孟子正文。

次讀中庸正文。

次讀孝經刊誤⁽¹⁾。

一、讀書、倍溫書、說書、習字、演文、並如前法。

次讀易正文。

六經正文、依程子、朱子、胡氏、蔡氏⁽²⁾句讀、參廖氏⁽³⁾、及古注⁽⁴⁾、陸氏音義⁽⁵⁾、賈氏音辨⁽⁶⁾、牟氏音攷⁽⁷⁾。
一、讀書、倍溫書、說書、習字、演文、並如前法。

次讀書正文。

次讀詩正文。

次讀儀禮并禮記正文。

次讀周禮正文。

次讀春秋經并三傳正文。

前自八歲約用六七年之功、則十五歲前小學書、四書、諸經正文、可以盡畢。既每細段看讀百遍、倍讀百遍、又通倍讀大段。早倍溫册首書、夜以序通倍溫已讀書。守此、決無不熟之理。

〔校異〕

a 一：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。

b 一：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。

c 一：叢

書集成本・四庫全書本、此の字無し。 d 並：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 e 詩：叢書集成本、

「書」に作る。 f 讀：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。

〔注釈〕

(1) 孝經刊誤：朱熹『孝經刊誤』一卷。朱熹は『孝經』二十二章には後人の附会が多いとみなし、經と伝に分け、重複する箇所や誤りを削り、章の順序を入れ替えるなどして整理しなおし、『孝經刊誤』を著した。同書は『朱文公文集』巻六六にも収められる。

(2) 程子朱子胡氏蔡氏：程頤『易伝』四卷、朱熹『詩集伝』八卷、『儀礼経伝通解』三十七卷・続二十九卷、^{南宋}胡安国『春秋伝』三十卷、^{南宋}蔡沈『書集伝』六卷のこと。

胡安国（一〇七四―一一三八）、字は康侯、諡は文定、福建崇安の人。二程の学をまなび、一門からは胡寅・胡宏等を輩出している。『春秋』の大義大法による国論の統一を目的として『春秋伝』を著したが、中には必ずしも経旨に合致しない攘夷復讐論も見られる。また『武夷集』『資治通鑑挙要補遺』などの著がある。伝は『宋史』巻四三五、『宋元学案』巻三四など。

蔡沈（一一六七―一二三〇）、字は仲默、福建建陽の人。九峰先生と称される。父蔡元定は朱熹の友人であり、蔡沈も若くして朱熹に師事した。朱熹の命を受け、未完のままであった『尚書』の伝を完成させる。伝は『宋史』巻四三四、『宋元学案』巻六七など。

(3) 廖氏：廖徳明のこと。ここでは廖徳明が朱熹の語を記録した『文公語録』（一名、『朱子語録』）を指す。

廖德明、字は子晦、号は槎溪。福建順昌の人。乾道五年（一一六九）の進士。その『文公語録』は、朱熹の語録の中でも最も早い時期のもので、「朱子語録姓氏」（『朱子語類』巻首）には「癸巳以後所聞」として筆頭に廖德明の名が挙げられる。癸巳は、乾道九年（一一七三）、朱熹四四歳。また『春秋会要』、『槎溪集』等の著がある。伝は『宋史』巻四三七、『宋元学案』巻六九など。

(4) 古注：漢唐の人が著した経書の注釈をいう。朱熹など宋人の注釈を新注、後漢鄭玄など漢唐人の注釈を古注と呼び、ここでは主に『五経正義』に採用された注釈を指す。

(5) 陸氏音義：唐陸德明『經典釈文』三十巻のこと。『五経』『論語』や『老子』『莊子』等の文字の発音や異同について著した。

(6) 賈氏音辨：北宋賈昌朝『群経音弁』七巻のこと。賈昌朝（九九八〜一〇六五）、字は子明、河北獲鹿の人。各経書には音訓・意義の異なる字が多いことから、それらを一つ一つ採り上げて弁正し、『群経音弁』を著した。伝は『宋史』巻二八五、『宋元学案補遺』巻九八など。なお、『分年日程』巻三（底本四丁）には、「字音清濁辨」（『群経音弁』巻六）の全文が収められる。

(7) 牟氏音攷：元牟応龍『五経音攷』のこと。牟応龍（一二四七〜一三二四）、字は伯成、一に成甫。浙江湖州の人。その著『五経音攷』は、当世には盛行したと言われるが、今は佚して伝わらない。伝は『元史』巻一九〇、『宋元学案』巻八〇など。

〔通釈〕

『小学』は以上である。

次は、『大学』の経・伝の本文を読む。

一、読書・暗誦復習・解説・文字の練習・作文練習は、前述の方法の通りである。

次は、『論語』の本文を読む。

次は、『孟子』の本文を読む。

次は、『中庸』の本文を読む。

次は、『孝経刊誤』を読む。

一、読書・暗誦復習・解説・文字の練習・作文練習は、みな前述の方法の通りである。

次は、『易経』の本文を読む。

六経の本文は、程子（『易伝』）・朱子（『詩集伝』『儀礼経伝通解』）・胡氏（『春秋伝』）・蔡沈（『書集伝』）に依拠して句読を附し、廖徳明（『文公語録』）及び古注・陸徳明の音義（『経典釈文』）・賈昌朝『群経音弁』・牟応龍『五経音攷』を参照する。

一、読書・暗誦復習・解説・文字の練習・作文練習は、みな前述の方法の通りである。

次は、『書経』の本文を読む。

次は、『詩経』の本文を読む。

次は、『儀礼』並びに『礼記』の本文を読む。

次は、『周礼』の本文を読む。

次は、『春秋』の経文並びに三伝（左氏伝・公羊伝・穀梁伝）の本文を読む。

八歳から六、七年間ほど集中して学問を修めていけば、十五歳以前には、『小学』『四書』と諸経書の本文はすべて終えられよう。小段ごとに素読百回、暗誦百回した上に、さらに通して大段を暗誦し、早朝には初めから暗誦復習し、夜には読み終わったところまでを順序通りに通して暗誦復習していく。これを守るならば、決して熟達しない道理はない。

自十五志學之年、即當尚志。爲學以道爲志、爲人以聖爲志。自此依朱子法讀四書注。或十五歳前用工失時失序者、止從此起、便讀大學章句或問、仍兼補小學書。

〔校異〕

a 依：叢書集成本、「以」に作る。 b 失：叢書集成本、「夫」に作る。

〔通釈〕

十五歳志学の歳からは、志を尚ばねばならぬ。学問においては道を志とし、人としては聖人を志とする。このときから、朱子の方法に依拠して四書の注を読んでいく。十五歳以前の工夫が時期・順序を誤った場合は、これよりただ奮起して、『大学章句』『大学或問』を読みながら、併せて『小学書』を学んで埋め合わせをしていく。

讀大學章句或問。

一、讀書、倍溫書、所讀字數分段、看讀百遍、倍讀百遍、並如前法。

一、夜間玩索倍讀已讀書、玩索讀看性理書、並如前法。必確守朱子讀書法六條、居敬持志、循序漸進、熟讀精思、虚心涵泳、切己體察、著緊用力。必以身任道、靜存動察、敬義夾持、知行並進、始可言學。

不然則不誠無物、雖勤無益也。朱子論學者曰、學者書不記、熟讀可記、義不精、細思可精。惟有志不立、真是無著力處。只如今人、貪利祿、而不貪道義、要作貴人、而不要作好人、皆是志不立之病。直須反覆思量、究其病痛起處、勇猛奮躍、不復作此等人、一躍躍出、見得聖賢千言萬語、都無一字不是實語、方始立得此志。就此積累工夫、迤邐向上去、大有事在。諸君勉旃、不是小事。又如程子四箴、

朱子敬齋箴、⁽³⁾西山夜氣箴、⁽⁴⁾當熟玩體察。外有天台南塘陳先生「名栢、字茂卿。」夙興夜寐箴。⁽⁵⁾曰、雞鳴而寤、思慮漸馳。盍於其間、澹以整之。或省舊愆、或紬新得。次第條理、瞭然默識。本既立矣、味爽乃興。盥櫛衣冠、端坐斂形。提掇此心、瞭如出日。嚴肅整齊、虛明靜一。乃啓方冊、對越聖賢。夫

子在坐、顏曾後先。聖師所言、親切敬聽。弟子問辯、反覆參訂。事至斯應、則驗于爲。明命赫然、常目在之。事應既已、我則如故。方寸湛然、凝神息慮。動靜循環、惟心是監。靜存動察、勿貳勿三。讀書之餘、間以游泳。發舒精神、休養情性。日莫人倦、昏氣易乘。齊莊正齊、振拔精明。夜久斯寢、齊手斂足。不作思惟、心神歸宿。養以夜氣、貞則復元。念茲在茲、日夕乾乾。昔金華魯齋王先生「名栢、字會之。」以爲此箴甚切、得受用、以教上蔡書院諸生、使之入寫一本置座右。又云養以夜氣、足以證

西山之誤。⁽⁸⁾

〔校異〕

a 居敬持志く著緊用力：叢書集成本・四庫全書本、此の二十四字を割注扱いとする。 b 復：底本、「伏」に作る。叢書集成本・四庫全書本に従つて改める。 c 理：叢書集成本、「邈」に作る。 d 皦：叢書集成本・四庫全書本、「皎」に作る。 e 出日：叢書集成本、「日出」に作る。 f 貳：叢書集成本・四庫全書本、「二」に作る。 g 得：四庫全書本、「實」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子論学者曰く不是小事：『朱文公文集』卷七四に「又論学者」として収める。なお、「校異」bで示した「復」字は、『朱文公文集』（明嘉靖刊本、四部叢刊所収）でも「復」に作る。

(2) 程子四箴：程頤が著した「視箴」「聽箴」「言箴」「動箴」の四つの箴（戒め）のこと。『河南程氏文集』卷八・伊川先生文四に収める。『論語』顔淵篇に見える孔子の「非礼勿視、非礼勿聽、非礼勿言、非礼勿動」「礼に非ざれば視ること勿かれ、礼に非ざれば聴くこと勿かれ、礼に非ざれば言ふこと勿かれ、礼に非ざれば動くこと勿かれ」の語を踏まえる。これは顔回が克己復礼について質問した際に、孔子が答えた語であり、程頤はその序文に「顔淵事斯語、所以進於聖人。」（顔淵斯の語を事とするは、聖人に進む所以なり。）と述べて、この四者を聖賢の学の要訣とみなし誠めとした。

(3) 朱子敬齋箴：朱熹「敬齋箴」。聖賢の学において、朱熹が重視した敬の方法や心構えなどが説かれた箴。『朱文公文集』卷八五に収める。

(4) 西山夜気箴：南宋真德秀「夜気箴」。孟子が説いた「夜気」説に基づき、人は夜気を養うべきであると

説いた箴。『西山文集』卷三三に収める。西山は、真徳秀の号。既出、本誌第一三号一四一頁参照。

- (5) 天台南塘陳先生夙興夜寐箴：南宋陳柏「夙興夜寐箴」。「朝夕箴」ともいう。陳柏、字は茂卿、号は南塘、浙江仙居の人。伝は『宋元学案補遺』卷六九。陳柏についての詳しい事績は分からないが、その「夙興夜寐箴」は朝鮮の朱子学者李滉（一五〇一〜一五七〇、号は退溪）が「聖学十図」の第十図に取り上げたことによつて、後の朝鮮・日本において知られる。阿部吉雄「聖学十図を進るの筈、並に図」（『朝鮮の朱子学 日本の朱子学（上）』（朱子学大系第十二巻）明徳出版社、一九七七年三月所収）に訳注がある。

- (6) 金華魯齋王先生：南宋王柏。既出、本誌第一五号五二頁参照。

- (7) 上蔡書院：南宋景定年間（一二六〇〜一二六四）、王華甫により創設。浙江台州東湖の湖畔にあり、北宋の謝良佐（上蔡）を祀る。王柏と上蔡書院の関係について、『元史』卷一八九・張須しよ伝には、「金華王栢得朱熹三傳之學、嘗講道於台之上蔡書院」（金華の王栢 朱熹三伝の学を得、嘗て台（台州）の上蔡書院に講道す）とみえる。

- (8) 西山之誤：陳柏「夙興夜寐箴」と真徳秀「夜気箴」を比較した場合、「夜気箴」は「昏冥ちやんが易忽ゆるが之際、尤當致謹戒之功」（昏冥 忽せにし易きの際に、尤も當に謹戒の功を致すべし）と緊張感を失う夜半での工夫を重視するのに対し、「夙興夜寐箴」は日夕の工夫を重視する。この見解の差異を「夜気を以て養う」の解釈にあるとして、真徳秀の「夜気箴」を誤りとしたのであろう。

〔通釈〕

『大学章句』・『大学或問』を読む。

一、読書・暗誦復習・読む字数と段落の分け方、素読百回、暗誦百回することは、みな前述の方法の通りである。

一、夜間にすでに読んだ書を暗誦玩味すること、性理書を素読玩味することは、みな前述の方法の通りである。

必ず『朱子読書法』六条の「敬に居り志を保ち、順序通りゆっくりと進み、熟読してつまびらかに考察し、虚心に深く浸透させ、自身に即して体察し、重要な所に力をそそぐこと」を遵守する。必ず自身で道を担うようにし、静時には存養し動時には省察し、敬義をもとに保持し、知行は同時に進捗させてこそ、はじめて学と称するに足る。そうでなければ「誠でなければ事物は存在しない」（『中庸』）というように、勤めたところで得る所がないのである。

朱子は学ぶ者に諭して言っている、「学ぶ者は、書物を暗記していなければ、熟読して暗記せよ。義がつまびらかでなければ、仔細に考察してつまびらかにせよ。しかし、志が立っていないければ、工夫が着手しようがない。近時の人は利禄に貪欲だが、道義には貪欲でなく、富貴な人にはなろうとしても、善良な人にはなろうとしない。このようなことはみな志が立っていない弊害なのだ。ひたすら思慮を廻らせてその弊害の元凶をつきとめ、果敢に奮起し、こうした凡庸な人間になり下がることなく、さらに一頭地を抜いて、聖賢のあらゆる言葉は全て実語だったと了解してこそ、はじめて志を立てることができ。これより工夫をかさねて次第に向上してゆけば、大いに成すことがあるだろう。諸君、努力せよ。

小事ではないのだ」。

さらに程子の「四箴」、朱子の「敬齋箴」、真西山（真徳秀）の「夜気箴」などについても熟読玩味体察せよ。そのほか天台の陳南塘先生〔名は柏、字は茂卿〕の「夙興夜寐箴」がある。それには、「鶏が鳴く朝早くに目覚め、思考が次第に働いてくる。この機会にこそ、心を静め整えるべきであろう。旧悪を反省したり、新しく修得したことを尋ね窮め、規範や道理は、しっかりと心に理解せよ。もといは立ったのだ、明け方になったら起き上がり、洗顔整髪し衣冠を整え、正座して姿勢を正し、心を整え朝日のごとく明らかにし、整齐嚴肅として、心静かに静一であれ。それから書物をひらき、聖賢（の言）と向き合う。孔夫子は座にあり、顔子・曾子が傍らにあるように、聖人の言は我が事として謹んで聴き、弟子の質問は繰り返し考究せよ。事物に対処するときには、我が行為を驗訊しながら、はっきり明らかに、絶えず注意を向けていよ。事物への対処が済めば、もとのようにして、心をゆつたりと、精神を凝らせて思慮を休ませる。動静の循環は、この心が主宰となる。静時には存養し動時には省察し、二つ三つに意識を散らしてはならない。読書のあいまには、時にくつろぎ、精神をのびやかにさせ、情性を休養させる。日が暮れると人は疲れ、濁った気に乗せられやすい。厳かに衣冠を整え、精神を奮い立たせよ。夜が更けてから就寝するに、手足を整え、思慮を起こさず、精神をあるべきところに帰せしめよ。夜気によって養っていけば、（「元亨利貞」の貞が元にもどって循環するように）貞は翌朝また元となる。これを念じて心をつけて、日夜努力し続けよ」という。かつて金華の王魯齋先生〔名は柏、字は会之〕は、この箴を非常に切要であるとし、受け継いで上蔡書院の諸生を教えるのに用い、これを一人一

本書写させて座右に置かせた。また（『夙興夜寐箴』に）「夜気によつて養う」とあるのは、真西山の誤りを明らかにするのに充分であるという。

大學章句或問畢。

次讀論語集注。

次讀孟子集注。

次讀中庸章句或問。

次鈔讀論語或問之合于集注者。

次鈔讀孟子或問之合于集注者。

次讀本經。

〔校異〕異同無し。

〔通釈〕

『大學章句』・『大學或問』は、以上である。

次は、『論語集注』を読む。

次は、『孟子集注』を読む。

次は、『中庸章句』・『中庸或問』を読む。

次は、『論語或問』で、『論語集注』の説と符合するところを書き写して読む。
次は、『孟子或問』で、『孟子集注』の説と符合するところを書き写して読む。
次は、『五経』を読む。

治周易。鈔法。一、依古易十二篇⁽¹⁾。勿鈔彖傳象傳、附每段經文之後。先手鈔四聖經傳正文、依古易讀之。別用紙依次鈔每段正文。次低正文一字鈔所主朱子本義。次低正文一字鈔所主程子傳。其連解彖傳象傳者、須截在彖傳象傳正文後鈔⁽³⁾。次低正文一字節鈔所兼用古註疏。次低正文二字附節鈔陸氏音義。次節鈔胡庭芳所附朱子語錄文集⁽⁴⁾、何北山啓蒙繫辭發揮、朱子孫鑑所集易遺說⁽⁵⁾。去其重者。次低正文二字節鈔董氏所附程子語錄文集⁽⁷⁾。次低正文三字節鈔胡庭芳所纂諸家解、及胡雲峰易通、及諸說精確而有裨朱子本義者。其正文分段、以朱子本義爲主。每段正文、既鈔諸說、仍空餘紙、使可續鈔。其讀易綱領、及先儒諸圖、及說、鈔于卷首。圖在啓蒙者不可移。讀法。其朱子本義、程子傳、所節古注疏、並依讀四書例、盡填讀經空眼簿如前法。須令先讀五贊⁽⁹⁾、啓蒙、及發揮、次本義。畢、然後讀程子傳。畢、然後讀所節古注疏。其所附鈔、亦玩讀其所當讀者、餘止熟看參攷。其程子傳、古注疏、與朱子本義訓詁指義同異、以玩索精熟爲度。異者以異色筆批抹。每卦作一冊。

[校異]

a 諸家：叢書集成本・四庫全書本、「朱子」に作る。

(1) 古易十二篇：呂祖謙『古易』十二卷のこと。彖伝・象伝を独立した巻として立て、本卦の卦辞文辞の後ろには続けない。『直齋書録解題』巻一・易類に、「古易十二卷……朱晦庵刻之於臨漳會稽、益以程氏は正文字及晁氏説。其所著本義、拠此本也」(『古易』十二卷、……朱晦庵之を臨漳・會稽に刻し、益すに程氏は是正せる文字及び晁氏の説を以てす。其の著す所の『(周易)本義』は、此の本に拠るなり)とある。

呂祖謙(一一三七—一一八一)、字は伯恭、浙江金華の人。東萊先生と称される。朱熹と親交が厚く、周敦頤・程顥・程頤・張載の遺文を集めて『近思録』十四巻を共編した。また朱熹と陸九淵兄弟との講学の場を設け、いわゆる鵝湖の会を斡旋したことで知られる。著には、『東萊先生書説』十巻・『呂氏家塾読詩記』三十二巻・『東萊左氏博議』二十五巻・『東萊集』四十巻・『宋文鑑』一百五十巻などがある。伝は『宋史』巻四三四・『宋元学案』巻五一など。

(2) 四聖経伝：『易』の経伝本文のこと。朱熹『周易本義』冒頭に、「経則伏羲之画、文王・周公之辞也。並孔子所作之伝十篇、凡十二篇」とあり、伏羲・文王・周公・孔子の四聖人が『易』経伝十二篇を著したことを説く。

(3) 其連解後鈔：『易』の彖伝・象伝は、本卦の卦辞文辞の後に分割して附される形式が多いが、朱熹は、呂祖謙『古易』のように彖伝・象伝を独立させるべきことを説く。ここでは、程頤『易伝』が卦辞文辞の後に彖伝・象伝を分割して附しているの、それを抜きだして『古易』の編次に従っ

て、独立した巻に書き写すことをいう。

(4) 胡庭芳所附朱子語録文集…^{南宋}胡一桂が『周易本義通釈附録纂疏』に引用した『朱子語録』・『朱子文集』の『易』に関する記述のこと。

胡一桂(一二四七?)、庭芳は字。号は双湖先生、江西婺源の人。『易』に精通し、『朱子文集』

『朱子語録』の中から『易』に関する話題を採り上げて、朱熹『周易本義』に附し、諸儒の優れた見解も集めて『周易本義通釈附録纂疏』十四巻を著した。伝は『元史』巻一八九、『宋元学案』巻八九。

(5) 何北山啓蒙繫辭發揮…^{南宋}何基『啓蒙發揮』二巻・『繫辭發揮』二巻。何基は既出、本誌第一五号五二頁参照。『啓蒙發揮』『繫辭發揮』は今は佚して伝わらないが、^{南宋}王柏「啓蒙發揮後序」(『魯齋集』巻五所収)に「纂輯朱子之諸論、羽翼朱子之成書、不敢自加一字、而条理燦然群疑尽釈」(朱子の諸論を纂輯し、朱子の成書に羽翼し、敢て自ら一字を加へざるも、条理燦然として群疑尽く釈く)とあることからすれば、朱子の『易』に関する論説を集めたものであったのであろう。

(6) 朱子孫鑑所集易遺説…^{南宋}朱鑑『文公易説』二十三巻のこと。朱鑑、字は子明、江西婺源の人。朱塾の子、すなわち朱熹の孫。『易』に関する朱熹の雜著や門人が記録した口授の言を輯集して『文公易説』を著した。また『詩伝遺説』の著がある。伝は『宋元学案』巻四九。

(7) 董氏所附程子語録文集…^{南宋}董楷が『周易伝義附録』に引用した程子の語録・文集のこと。董楷(一二二六?)、字は正翁、号は克齋、浙江臨海の人。二程・朱熹の文集・語録には、まだ『易』の書に反映されていない見解があることから、その不備を補う形で二程・朱熹の説を各章の末に附して『周

易伝義附録』十四巻を著した。書名はもと『周易程朱氏説』と云う。伝は『宋元学案』巻六五。

(8) 胡雲峰易通：^元胡炳文『周易本義通釈』十二巻のこと。胡炳文は既出、本誌第十五号六五頁参照。朱熹の『周易本義』に基づきながら、諸儒の『易』解釈を採り上げて、朱熹の解釈をより明確にさせようとして『周易本義通釈』を著した。

(9) 五贊：朱熹「周易五贊」。「原象」「述旨」「明筮」「稽類」「警学」の五つの贊。通行本では『周易本義』に附されているが、もとは『易学啓蒙』の附であった。『朱文公文集』巻八五にも収める。

〔通釈〕

『周易』をおさめる。

〔鈔法〕一、『古易』十二篇に依る。象伝・象伝は一段ごとに經文の後に付けて書き写してはならない。まず手ずから四聖（伏羲・文王・周公・孔子）の經伝の本文を書き写し、『古易』に従って読む。用紙を別に換えて、順序に従って、各段の本文を書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、該当するところの朱子『周易本義』を書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、該当するところの程子『易伝』を書き写す。象伝・象伝は（經文の卦辞爻辞ごとに）分割後附して解釈してあるので、その部分は抜き出して象伝・象伝自体の本文の後ろに書き写すのが良い。

次は、本文より一文字を下げて、兼ねて用いられてきた古注疏を節に分けて書き写す。

次は、本文より二文字を下げて、陸徳明の音義（『經典釈文』を節ごとに分けて書き写す。

次は、胡庭芳が（『周易本義通釈附録纂疏』に）附した『朱子語録』と『朱子文集』・何北山『啓蒙發揮』『繫辭發揮』・朱鑑（朱子の孫）の集成した『文公易說』を節ごとに分けて書き写す。重複する箇所は削る。

次は、本文より二文字を下げて、董楷が（『周易伝義附録』に）附した『程子語録』・『程氏文集』を節ごとに分けて書き写す。

次は、本文より三文字を下げて、胡庭芳が編纂した諸家の解釈や胡雲峰『周易本義通釈』、及び諸説の精確にして朱子『周易本義』に裨益のあるものを節ごとに書き写す。

本文の段落分けは、朱子『周易本義』を基準とする。各段の本文は、諸説を書き終わって、まだ紙に空白があれば、続けて書き写させる。『易』を読む綱領および先儒の諸図、諸説は、書の冒頭に書き写す。『啓蒙』の図は、移してはならない。

〔読法〕 朱子『周易本義』・程子『易伝』・先に分節した古注疏を、「読四書例」に従って「読経空眼簿」に埋めていくことは、前述の方法の通りである。

先に「周易五賛」・『啓蒙發揮』・『繫辭發揮』を、その次に『周易本義』を読ませ、それが終わってから程子『易伝』を読ませ、それから節ごとに分けた古注疏を読ませる必要がある。後附して書き写させたものは、当然読むべきところを熟読玩味し、それ以外のところはよく読んでおいて参考にさせる。

程子『易伝』・古注疏・朱子『周易本義』の訓詁・指義・同異については、よくよく熟読玩味し考えを成熟させていくことによって基準を設けていく。諸説の異なるところは、筆の色を変えて批抹する。

一卦ごとに一冊とする。

治尚書。鈔法。先手鈔全篇正文讀之。別用紙鈔正文一段。次低每段正文一字鈔所主蔡氏傳。次低正文一字節鈔所兼用古注疏。次低正文二字附節鈔陸氏音義。次低正文二字節鈔朱子語錄、文集之及此段者。次低正文三字節鈔金氏表注、⁽¹⁾及董氏所纂諸儒之說、⁽²⁾及諸說精確而有裨蔡氏傳者。其正文分段、以蔡氏傳爲主。每段正文、既鈔諸說、仍空餘紙、使可續鈔。其書序、⁽³⁾及朱子所辯、⁽⁴⁾附鈔每篇之末。其讀書綱領、及先儒諸圖、鈔于首卷。讀法。^b其蔡氏傳、及所節古注疏、並依讀四書例、盡填讀經空眼簿如前法。其所附鈔、亦玩讀其所當讀者、餘止熟看參攷。須令先讀蔡氏傳。畢、然後讀古注疏。其古注疏、與蔡氏傳訓詁指義同異、以玩索精熟爲度。異者以異色筆批抹。每篇作一冊。

〔校異〕

a 及：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 b 讀法：叢書集成本・四庫全書本、「讀書法」に作る。

〔注釈〕

(1) 金氏表注：元金履祥『尚書表注』二卷。注釈を経文の後ろではなく、欄外に附すという体裁をとる。その序では、蔡沈『書集伝』は朱熹の語録が集められる前に書かれているため、その説に遺漏の多いことを指摘する。『書集伝』との解釈の異同も多い。

金履祥は既出、本誌第一五号六五頁参照。

(2) 董氏所纂諸儒之說：南宋董鼎『尚書輯錄纂注』六卷のこと。董鼎、字は季亨、江西鄱陽の人。董鼎の族兄は、朱熹に学んだ黄榦の門人。董鼎はその族兄に学んで朱熹に私淑した。蔡沈『書集伝』に基づき、そこに朱熹の主旨に合致する諸家の解釈を附して、『書経輯録纂注』を著した。伝は『宋元学案』巻八九。

(3) 書序：書序は二種ある。一は『尚書』巻首の「序」で、前編孔安国の撰とされる。一は『尚書』各篇首の「序」のこと。ここでは後者を指す。

(4) 朱子所辯：朱熹自身は、『尚書』に対するまとまった注釈を著していない。東景南「朱熹著述考略」(『朱熹年譜長編』華東師範大学出版社、二〇〇一年九月所収)では、朱熹の『尚書』に関する記述を編纂したものとして、南宋黄子毅による『書伝輯略』七巻・南宋湯中による『文公書説』・南宋蔡沈による『書経問答』一巻を挙げている。

〔通釈〕

『尚書』をおさめる。

〔鈔法〕 まず手ずから全篇の本文を書き写して読む。用紙を別に換えて、本文一段を書き写す。

次は、一段ごとに本文より一文字を下げて、該当するところの蔡沈『書集伝』を書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、兼ねて用いられてきた古注疏を節に分けて書き写す。

次は、本文より二文字を下げて、陸徳明の音義(『經典釈文』)を節に分けて続けて書き写す。

次は、『朱子語録』・『朱子文集』でその段に言及しているところを節に分けて書き写す。

次は、本文より三文字を下げて、金履祥『尚書表注』・董鼎が（『書経輯録纂注』で）編纂した諸儒の説、及び諸説の精確にして蔡沈『書集伝』に裨益あるものを節に分けて書き写す。

本文の段落分けは、蔡沈『書集伝』を基準とする。各段の本文は、諸説を書き終わって、まだ紙に空白があれば、続けて書き写させる。書序・朱子の弁論したことは、各篇の末尾に書き写す。『尚書』を読む綱領・先儒の諸図・諸説は、巻の冒頭に書き写す。

〔読法〕 蔡沈『書集伝』、及び先に分節した古注疏を、「読四書例」に従って「読経空眼簿」に埋めていくことは、前述の方法の通りである。

後附して書き写させたものは、当然読むべきところを熟読玩味して、それ以外のところはよく読んでおいて参考にさせる。まず蔡沈『書集伝』を読ませ、それが終わってから古注疏を読ませる必要がある。

古注疏・蔡沈『書集伝』の訓詁・指義・同異については、よくよく熟読玩味し考えを成熟させていくことによって基準を設けていく。諸説の異なるところは、筆の色を変えて批抹する。

各篇ごとに一冊とする。

治詩。鈔法。先手鈔詩全篇正文讀之。別用紙鈔詩正文一章。音義協音、¹並依朱子。次低正文一字鈔所主朱子傳。次低正文一字節鈔所兼用古注疏。次低正文二字附節鈔陸氏音義。次低正文二字節鈔朱子語録、文集之及此章者。次低正文三字節鈔輔氏童子問、²及魯齋王氏詩疑辨、³及諸説精確而有裨朱子傳者。每段

正文、既鈔諸説、仍空餘紙、使可續鈔。其詩小序及朱子所辯、附鈔每篇之末。其讀詩綱領、及先儒諸圖、鈔于首卷。讀法。其朱子傳、及所節古注疏、並依讀四書例、盡填讀經空眼簿如前法。其所附鈔、亦玩讀其所當讀者、餘止熟看參攷。須令先讀朱子傳。畢、然後讀古注疏。其古注疏、及朱子傳訓詁指義同異、以玩索精熟爲度。異者以異色筆批抹。每篇作一冊。

〔校異〕 異同無し。

〔注釈〕

(1) 協音：協韻に同じ。本来異なる韻が、同一の韻として通じる韻をいう。『分年日程』卷三（底本十八丁）には、傳本鄭樵『通志』卷三四・六書略第四所収の「協音借義」「借協音不借義」が収められる。

(2) 輔氏童子問：傳本輔広『詩童子問』十卷。輔広は既出、本誌第一三号一二〇頁参照。朱熹『詩集伝』を裨益することを主として、平日、朱熹から聞いた解説を附して『詩童子問』を著した。卷首に「大序」・「小序」を載せ、『尚書』・『周礼』・『論語』で『詩』に言及しているものを採録してそれぞれに注釈を附し、諸儒の弁説をも備録した。

(3) 魯齋王氏詩疑辨：傳本王柏『詩疑』二卷。王柏は既出、本誌第一五号五二頁参照。王柏の学問は朱熹に基づくものであるが、『詩経』解釈は異にする。朱熹が基本的には小序を論駁しただけなのに対し、王柏は小序など漢儒の見解のみならず、本経をも論駁して『詩疑』を著した。

(4) 朱子所辯：東景南「朱熹著述考略」には、『詩集伝』を除く朱熹の『詩』に関する著作として、朱熹早年の作である『毛詩集解』や、朱熹の孫傳本朱鑑の編じた『文公詩伝遺説』、門人傳本晏淵の編じた『晦

翁詩譜』などが挙げられる。

〔通釈〕

『詩』をおさめる。

〔鈔法〕まず手ずから『詩』全篇の本文を書き写して読む。用紙を別に換えて、『詩』の本文一章を書き写す。音・義・協韻は、すべて朱子『詩集伝』に従う。

次は、本文より一文字を下げて、該当するところの朱子『詩集伝』を書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、兼ねて用いられてきた古注疏を節に分けて書き写す。

次は、本文より二文字を下げて、陸徳明の音義（『經典釈文』）を節に分けて続けて書き写す。

次は、本文より二文字を下げて、『朱子語録』・『朱子文集』でその章に言及しているところを節に分けて書き写す。

次は、本文より三文字を下げて、輔広『詩童子問』・王柏『詩疑』、及び諸説の精確にして朱子『詩集伝』に裨益のあるものを節に分けて書き写す。

各段の本文は、諸説を写し終わって、まだ紙に余白があれば、続けて書き写させる。詩小序・朱子の弁論したことは、各篇の末尾に書き写す。『詩』を読む綱領、及び先儒の諸図は、巻の冒頭に書き写す。

〔読法〕朱子『詩集伝』、及び先に分節した古注疏は、すべて「読四書例」に従って、「読経空眼簿」を埋めていくことは、前述の方法の通りである。

後附して書き写させたものは、当然読むべきところを熟読玩味して、それ以外のところはよく読ん

において参考にさせる。まず朱子『詩集伝』を読ませ、それが終わってから古注疏を読ませる必要がある。

古注疏・朱子『詩集伝』の訓詁・指義・異同については、よくよく熟読玩味し考えを成熟させていくことによつて基準を設けていく。諸説の異なるところは、筆の色を変えて批抹する。

各篇ごとに一冊とする。

治禮記。鈔法。先手鈔每篇正文讀之。別用紙鈔正文一段。次低正文一字節鈔所用古注。次低正文一字節鈔疏。次低正文一字附節鈔陸氏音義。次低正文一字節鈔朱子儀禮經傳通解之相關者。次節鈔朱子語録、文集之及此段者。次低正文二字節鈔黃氏日鈔、陳氏櫟詳解、衛氏集解⁽¹⁾、衛氏集解⁽²⁾、衛氏集解⁽³⁾、其正文分段、以古注爲主。每段正文、既鈔諸説、仍空餘紙、使可續鈔。蓋治禮、必先讀儀禮經。其讀禮記綱領、及先儒諸圖、及楊氏儀禮圖、鈔于首卷。讀法。其所節古注并疏、依讀四書例、盡填讀經空眼簿如前法。其所附鈔、亦玩讀其所當讀者、餘止熟看參攷。其古注疏之所以合于經與否、以玩索精熟爲度。其未合者、以異色筆批抹。每篇作一冊、或二三冊。

〔校異〕

- a 一：叢書集成本、「二」に作る。 b 一：叢書集成本、「二」に作る。 c 一：叢書集成本、「二」に作る。
d 二：叢書集成本、「三」に作る。

〔注釈〕

(1) 黄氏日鈔…^{傳本}黄震『黄氏日鈔』九十七卷。卷一四から二九が「読礼記」にあたる。『黄氏日鈔』中の經書に関する記述の中で「読礼記」はその過半数を占める上に、全經文に注解を加えており、それ自体が一つのまとまった『礼記』の注釈書と見ることができる。『黄氏日鈔』の「読礼記」については、神林裕子『黄震の經学——「読礼記」における注釈の態度——』（『待兼山論叢・哲学編』二七、大阪大学文学部、一九九三年一二月）を参照。

黄震（一一二一—一三〇〇）、字は東発、号は於越、浙江慈溪の人。著には、『黄氏日鈔』の他に、『古今紀要』十九卷がある。伝は『宋史』卷四三八、『宋元学案』卷八六など。

(2) 陳氏櫟詳解…^元陳櫟『礼記集義』十卷のこと。陳櫟は既出、本誌第一五号六六頁参照。『礼記集義』は、『礼記』に関する諸説の異同を統合した書であったが、今は佚して伝わらない。なお、『礼記集義』という書名が通行したが、陳櫟の「自序」（皇慶元年（一一三二）、『定字集』卷一所収）には、『礼記集義詳解』と名づけたことが見える。

(3) 衛氏集解…^{傳本}衛湜『礼記集說』一百六十卷のこと。衛湜、^{しやく}字は正叔、江蘇呉の人。櫟齋先生と称される。『礼記集說』は、鄭玄以来、一百四十四家に及ぶ『礼記』に関する諸説を集めた膨大な著書。その中には、今では散逸した資料も数多く引かれる。伝は『宋元学案補遺』卷七九。

(4) 楊氏儀礼図…^{傳本}楊復『儀礼図解』十七卷。楊復、字は志仁、福建福安の人、一に福建長溪の人。『儀礼』十七篇それぞれの儀節陳設の方位を詳らかにし、図を附して『儀礼図解』を著した。また『祭礼』

十四卷、『家礼雜說附註』二卷などの著がある。伝は『宋元学案』卷六九。

〔通釈〕

『礼記』をおさめる。

〔鈔法〕まず手ずから篇ごとに本文を書き写して読む。用紙を別に換えて、本文一段を書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、用いられてきた鄭玄の古注を節に分けて書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、用いられてきた古注（疏）を節に分けて書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、陸徳明の音義（『經典釈文』）を節に分けて書き写す。

次は、本文より一文字を下げて、朱子『儀礼経伝通解』の關係のある箇所を節に分けて書き写す。続いて『朱子語録』・『朱子文集』でその段に言及しているところを節に分けて書き写す。

次は、本文より二文字を下げて、黄震『黄氏日鈔』の「読礼記」・陳櫟『礼記集義詳解』・衛湜『礼記集説』の精確にして本文や古注疏に裨益のあるものを節に分けて書き写す。

本文の段落分けは、古注を基本とする。各段の本文は、諸説を写し終わって、まだ紙に余白があれば、続けて書き写させる。やはり礼をおさめるには、まず『儀礼』本文から読ませなくてはならない。『礼記』を読む綱領、及び先儒の諸図、及び楊復『儀礼図解』は、巻の冒頭に書き写す。

〔読法〕先に分節した古注疏を、「読四書例」に従って「読経空眼簿」に埋めていくことは、前述の方法の通りである。

後附して書き写させたものは、当然読むべきところを熟読玩味して、それ以外のところはよく読ん

において参考にさせる。古注疏が本文の内容と合致するか否かは、よくよく熟読玩味し考えを成熟させていくことによつて基準を設けていく。玩索しても合致しない箇所は、筆の色を変えて批抹する。各篇ごとに一冊、もしくは二、三冊とする。

治春秋。鈔法。先手鈔正經、每一年作一段讀之。讀全經畢、別用紙鈔當年經文一段。次低經文一字節鈔所許用三傳、胡氏傳、¹⁾諸說之合于經之本義者。次低經文一字節鈔三傳、胡氏傳、諸說之未合者。次低經文二字附節鈔陸氏音義。次低經文二字鈔程端學所著辯疑或問、²⁾凡諸說之有裨正經三傳胡氏傳者、已詳見成書。每段正文、既鈔諸說、仍空餘紙、使可續鈔。其讀春秋綱領、及先儒諸圖、鈔于首卷。讀法。凡所節三傳胡氏傳、並依讀四書例、盡填讀經空眼簿如前法。其所附鈔、亦玩讀其所當讀者、餘止熟看參攷。其三傳胡氏之所以合于經與否、以玩索精熟爲度。其未合者以異色筆批抹。每年作一卷。每公作一冊、或一二三冊。

〔校異〕

a 許：四庫全書本、「節」に作る。 b 公：叢書集成本、「篇」に作る。

〔注釈〕

(1) 胡氏伝：胡安国『春秋伝』三十卷のこと。既出、本稿一二四頁・注(2)参照。

(2) 程端學所著辯疑或問：元程端學『春秋三伝弁疑』二十卷、及び『春秋或問』十卷。程端學(一二七八

（一三三四）、字は時叔、号は積齋。浙江鄞県の人。程端礼の弟。『春秋』に通じる。諸伝の中で經の意に合致するものを采輯して『春秋本義』三十卷を著し、さらに自身の見解を附した『春秋三伝弁疑』と三伝の疑義を訂正した『春秋或問』を著した。また『積齋集』五卷がある。伝は『元史』卷一九〇、『宋元学案』卷八七など。

程端礼自注（底本二十四丁）には、「端礼弟端学、自早年読四書諸經之余、用其二十余年之工注春秋。其大要、以程朱之論攷正三伝胡氏之得失、以為合於程朱之論、則合於經之旨矣。故用三伝胡氏之有合者為本義、諸說之合者亦附見焉、其相戾者為辨疑以正之、又摘諸說之害經者為或問以明所以去取之由。庶幾士之讀此經者、既可因程朱以得孔子作經之微旨、又所以仰遵設科許用之初意。其網羅之博、采択之精、当世諸老、亦許其有裨此經、而補朱子之所未注者云」（「端礼の弟端学、早年自り四書諸經を読むの余、其の二十余年の工を用いて春秋に注す。其の大要は、程朱の論攷を以て三伝・胡氏の得失を正す、以為へらく程朱の論に合すれば、則ち經の旨に合すと。故に三伝・胡氏の合する者有るを用いて『本義』を為り、諸說の合する者も亦た焉に附見す、其の相い戻る者は『辨疑』を為りて以て之を正す、又た諸說の經を害する者を摘みて『或問』を為りて以て去取する所以の由を明らかにす。庶幾はくは、士の此の經を読む者、既に程朱に因りて以て孔子經を作るの微旨を得可く、又た設科許用の初意を仰遵する所以ならんことを。其の網羅の博、采択の精は、当世の諸老も亦た其の此の經に裨して朱子の未だ注せざる所を補う者有りと許さんと云ふ」とある。

『春秋』をおさめる。

〔鈔法〕まず手ずから経文を、一年ごとに一段となるよう書き写して読む。全文読み終わったら、用紙を別に換えて、その年の経文一段を書き写す。

次は、経文より一文字を下げて、これまで認め用いられてきた三伝、および胡安国『春秋伝』、諸説の中で経文の本義に合致する箇所を節に分けて書き写す。

次は、経文より一文字を下げて、三伝・胡安国『春秋伝』・諸説で経文の本義に合致しない箇所を節に分けて書き写す。

次は、経文より二文字を下げて、陸徳明の音義（『經典釈文』）を節に分けて続けて書き写す。

次は、経文より二文字を下げて、程端学の著した『春秋三伝弁疑』・『春秋或問』と、諸説の経文・三伝・胡安国『春秋伝』に裨益のあるものをすべて書き写し、よくよく吟味して書冊となしていく。

各段の本文は、諸説を写し終わって、まだ紙に余白があれば、続けて書き写させる。『春秋』を読む綱領、及び先儒の諸図は、巻の冒頭に書き写す。

〔読法〕先に分節した三伝・胡安国『春秋伝』は、すべて「読四書例」に従って、「読経空眼簿」を埋めていくことは、前述の方法の通りである。

後附して書き写させたものは、当然読むべきところを熟読玩味して、それ以外のところはよく読んでおいて参考にさせる。三伝・胡安国『春秋伝』が経文の内容と合致するか否かは、よくよく熟読玩味し考えを成熟させていくことによって基準を設けていく。玩索しても合致しない箇所は、筆の色を変えて

批抹する。

各年ごとに一巻として、各公ごとに一冊もしくは二、三冊とする。

前自十五歳、讀四書經注或問、本經傳注、性理諸書、確守讀書法六條、約用三四年之功、晝夜專治。無非爲己之實學、而不以一毫計功謀利之心亂之、則敬義立、而存養省察之功密。學者終身之大本植矣。

程氏家塾讀書分年日程卷一

〔校異〕異同無し。

〔通釈〕

十五歳から四書の本文・注・或問、經書本文・伝・注、性理の諸書を読み、(その際には)『朱子讀書法』六条をしつかりと守って、三、四年間ほど集中して昼となく夜となく専ら學問を治めていく。己おのれのためにする実學をこそおさめ、わずかな功利心によっても乱すことがなければ、敬義は立ち、存養省察の工夫の効果は精密になる。こうして学ぶ者の終身の大本は確立するのである。

以上、『程氏家塾讀書分年日程』卷一。